

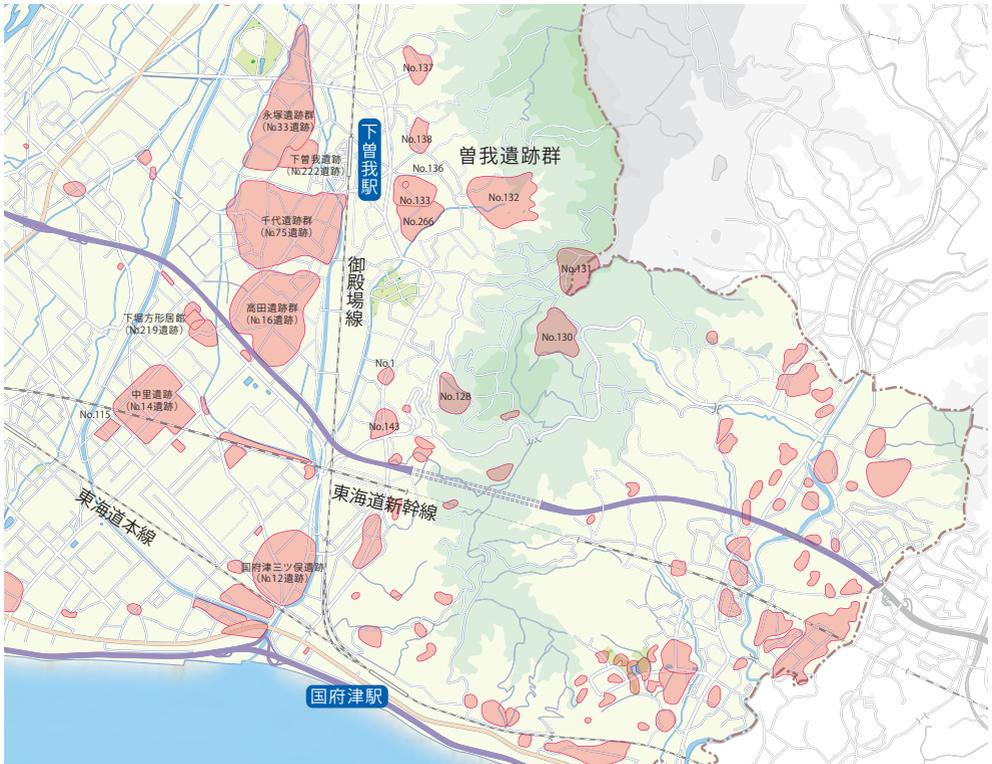
# 曾我遺跡群

—大磯丘陵に営まれた縄文集落と曾我氏の遺跡—



# 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は第13号として、小田原市曽我地域に所在する曽我遺跡群（小田原市 No.133・136・138遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成29年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）  
滝澤亮・浅賀貴広（株式会社盤古堂）、小池聡、岡潔・大貫みあき（小田原市郷土文化館）、鳥居紗也子（小田原市立図書館）、小此木健（神奈川県教育委員会）
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課三戸芽が担当となり、同課鈴木一彰・内田文明・山口剛志・高橋泰幸・三上芳範・下澤亜裕美・土屋了介・鈴木一史・土屋健作・野尻夏姫・佐野忠史・野頼弘美が補佐しました。写真の撮影は、市毛秀人の協力を得ました。



第1図 遺跡周辺位置図 (1/25,000)

[表紙] 曽我谷津岩本遺跡第I地点の敷石住居（西から）(提供：株式会社盤古堂)

[裏表紙] 曽我谷津岩本遺跡第I地点出土縄文土器

# I 曾我遺跡群の立地と環境

## 1 曾我遺跡群周辺の立地と歴史的環境

曾我遺跡群は、小田原市域の東側の大磯丘陵の西側裾部に展開する曾我丘陵に位置します。周辺は<sup>つるぎさわ</sup> 剣沢川、<sup>とのさわ</sup> 殿沢川が北から南へ流れ、谷戸が形成されています。森戸川に隔てられた南側には、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が展開する永塚・千代・高田の三つの台地があります。

曾我の名は『吾妻鏡』に登場し、12世紀半ばには曾我氏を領主とする曾我荘が置かれたとされます。鎌倉時代末期に成立した、曾我十郎<sup>すけなり</sup> 裕成、五郎時<sup>ときむね</sup> 到兄弟による親の仇討ちの物語である『曾我物語』には「曾我里」として登場するほか、天正18年（1590）の豊臣秀吉禁制には「相模國西郡内曾我」と記されます。

江戸時代後期に編纂された『新編相模国風土記稿』には、下曾我地区には曾我大沢村・上曾我村・曾我岸村・曾我谷津村・曾我原村・曾我別所村の六つの村があったことが記され、宗我神社が鎮守となっていました。

地名の由来は、古代大和朝廷で勢力をもった豪族蘇我氏が各地においた部民（蘇我部）からきたという説や曾我<sup>すけのぶ</sup> 祐信の父平祐<sup>すけいえ</sup> 家らの開発領主曾我氏からきたという説があります。



写真1 『曾我物語』の浮世絵（郷土文化館所蔵）

## 2 周辺の遺跡と調査のあゆみ

曾我遺跡群周辺での調査事例は多くはないものの、大磯丘陵西側にはNo.132・133・136・138・266遺跡などがあり、いずれも縄文時代から奈良・平安時代の遺物包蔵地が展開しています。

曾我地域での初めての本格的な発掘調査は、平成元年（1989）8月から9月に実施された物見塚古墳<sup>ものみづかこふん</sup>の学術調査です。これは、曾我地域一帯に所在する中世曾我氏ゆかりの文化財に対し、地域おこしの一環そして文化財愛護の精神育成・高揚を目的とした発掘調査の必要性について地元の声がおこり、実施に至ったものです。地元<sup>とようす</sup>の熱意と協力により、古墳の石室の調査が行われ、刀子<sup>てつぞく</sup>や鉄鏃<sup>てつぞく</sup>、金環<sup>きんかん</sup>などの副葬品が発見されました。

その後、平成17年（2005）には曾我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点の発掘調査が行われ、縄文時代中期後半から後期前半の集落跡を発見したほか、中世居館の区画溝と考えられる遺構を検出し、曾我氏の館を示す考古学的な発見として重要な成果がありました。

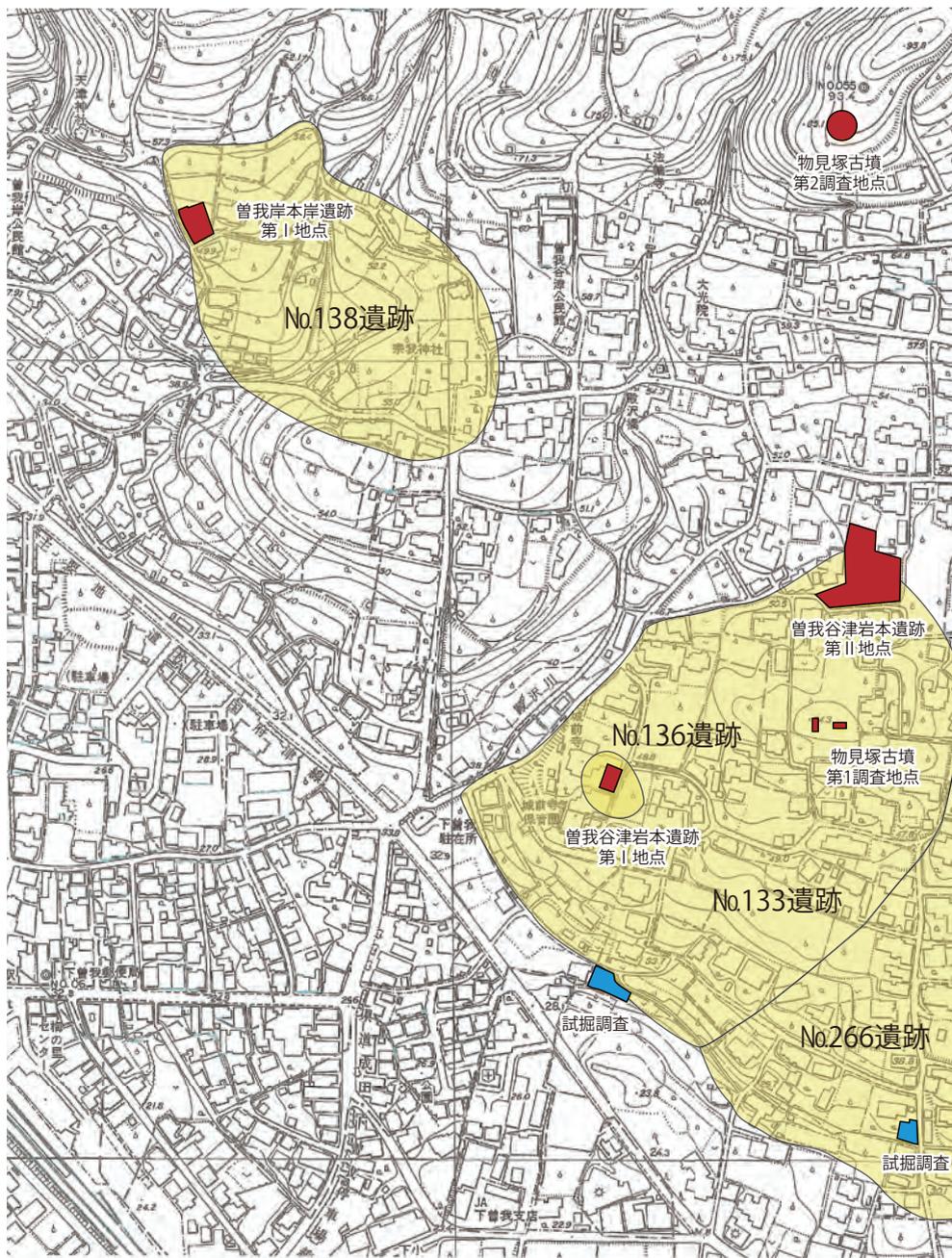
また、平成24年（2012）に行われた曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点の調査では、縄文時代の「台形土器」と呼ばれる土器製作台が多数まとまって発見されました。市内では初めての出土事例で、一度に16点もの出土は県内でも稀な例として注目を集めました。この発見を受け、平成27年（2015）には、「縄文土器を作る～縄文人の造作を支えた台形土器～」と題した遺跡講演会が開催され、縄文時代の土器製作について多角的な視点から検討する機会が設けられました。

曾我遺跡群には、発掘調査が実施された遺跡のほかにも、中世の石造物などが各地に色濃く残っています。

この冊子では、縄文時代から中世、そして現代まで続く曾我遺跡群の歴史について、これまでの考古学的な調査から明らかになってきたことを紹介します。



写真2 大磯丘陵から臨む足柄平野



第2図 調査地点位置図 (1/5,000)

表1 曾我遺跡群の調査地点一覧

遺跡名・調査内容	所在	調査主体	調査年月日	検出遺構	出土遺物
物見塚古墳 第1調査地点	曾我谷津字岩本574番	小田原市 教育委員会	1989年8月24日～ 9月13日	古墳時代：古墳	古墳時代：鉄鍬9、刀子1、金環3、石突1
	曾我谷津字上ノ山255番			なし	
曾我谷津字岩本遺跡 第1地点	曾我谷津字岩本592番外	小田原市 教育委員会 株式会社 盤古堂	2006年11月29日～ 12月29日	縄文時代：竪穴住居跡（柄鏡形敷石住居跡）	縄文時代：土器（早期・中期・後期）、石器 古墳時代：土師器 中世：中世陶磁器、かわらけ 近世：近世陶磁器、土器
				古墳時代：溝状遺構1 5 16、柱穴7	
No.133遺跡	曾我原字中町194番13	小田原市 教育委員会	2010年6月11日	なし	なし
曾我岸本岸遺跡 第1地点	曾我岸字本岸30番2	小田原市 教育委員会	2010年12月3日	奈良・平安時代：竪穴住居跡	縄文時代：土器 奈良・平安時代：土師器、須恵器
				2011年2月14日～ 5月16日	縄文時代：集石1 古墳時代後期～奈良・平安時代：竪穴住居跡10、土坑48、ピット12、溝状遺構1、焼成遺構1 近世：土坑28、ピット8、溝状遺構1
曾我谷津字岩本遺跡 第2地点	曾我谷津字岩本560番	小田原市 教育委員会	2012年8月27日～ 10月17日	時期不明：ピット	縄文時代：土器
				2014年10月1日	縄文時代：竪穴住居跡3、集石4、配石1、焼土2、土坑23、ピット21 古墳時代後期～奈良・平安時代：溝4、土坑3、ピット6 中世：溝状遺構1
No.266遺跡	曾我原字中町211番1の一部	小田原市 教育委員会	2014年10月1日	なし	なし

## II 曾我遺跡群のあけぼの (縄文時代)

### 1 柄鏡形敷石住居の発見（曾我谷津岩本遺跡第 I 地点の調査）

縄文時代は、今から約16,000年前に始まり、日本列島で縄文土器が製作・使用された時代です。旧石器時代の遊動生活から、竪穴住居を構築し、集落を営む定住的な生活へと変化した時代でもあります。縄文時代中期には多くの集落が造られましたが、地球規模での気候の寒冷化などが引き金となり、終焉を迎えます。そして、遺跡の規模や数が縮小する低迷期の後、新たに縄文後期社会が形成され、縄文時代最後の盛り上がりを見せます。

縄文時代中期に丘陵上に作られた集落は、水場環境や生態系の変化など周囲の環境が厳しくなったことに適応するため、縄文時代後期になると低地部へ遺跡の立地が変化し、集落を小規模化します。大磯丘陵の西裾で発見された曾我谷津岩本遺跡がその一例です。

曾我谷津岩本遺跡第 I 地点では、「柄鏡形敷石住居」という住居の出入口部分が外に張り出し、上から見ると柄鏡のような形をしている住居が発見されました。床面には平らな河原石が敷かれるという特徴を持ちます。特に曾我谷津岩本遺跡第 I 地点では、出入口から住居中央の炉跡までの間は、規則的に大型の礫を配していました。敷

表2 小田原市内の敷石住居一覧

遺跡名	立地	遺構名	時期	備考
天神山 I	天神山丘陵斜面	—	—	1961 年工事中の発見。敷石のみ。詳細不明
天神山 III		—	堀之内	2014・15 年調査
天神山 IV		—	堀之内	2013 年調査
御組長屋 II	天神山南側低地部	J-1 号	堀之内 1	1995・96 年調査。砂利敷住居跡
		J-2 号	加曾利 B1	1995・96 年調査。廃絶後に石積みの構築
欠ノ上	久野諏訪ノ原丘陵上か	—	—	詳細不明
星山	久野諏訪ノ原丘陵上か	—	—	1947 年あるいは 1948 年調査。詳細不明
諏訪ノ原清掃工場	久野諏訪ノ原丘陵上	—	称名寺か	1977 年調査
久野一本松		J-55 号住	称名寺	1993 年調査
		J-64 号住	加曾利 E4	1993 年調査
		J-69 号住	不明	1993 年調査
久野北側下 II	久野諏訪ノ原丘陵南側低地部	1 号住	堀之内	1994 年調査
久野北側下 IV		2 号住	堀之内	1995 年調査
森上 I		1 号住	加曾利 E4 ~ 称名寺	1996 年調査
曾我谷津岩本 I	大磯丘陵西側斜面	1 号住	堀之内 1	2006 年調査
沼代	大磯丘陵上	—	—	1949 年調査。詳細不明



写真3 柄鏡形敷石住居の検出状況（南から）（写真提供：株式会社盤古堂）

石に使用された石は、<sup>ねぶかわいし</sup>根府川石と呼ばれる板状に割れやすい性質のある石を用いており、市城南西部の根府川から石材を調達していたことがわかりました。

根府川石は、ち密安山岩の俗称で、箱根山系のうち南足柄市関場などに<sup>ろとう</sup>露頭が知られている、かなり産地の限定された石材です。この地方では、市内根府川を主産地としています。

住居跡内に敷石を施す事例は後期前葉の<sup>ほりのうち</sup>堀之内式期を中心に、中期後半の<sup>かそり</sup>加曽利E式期から後期中葉の加曽利B式期にわたります。地域的には、中部高地から関東地方西南部、さらに東北地方南部にまで分布することが知られています。

住居中央に配置された炉は石で囲われており、その中央には土器が埋められていました。



写真4 市内板橋の根府川石切場の様子（小田原市立図書館所蔵写真。昭和3年撮影）

ろたい  
炉体として使用された土器には、浅鉢形土器が二個体使用されており、二時期以上に渡って使用されていたことが明らかになりました。

曾我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点で発見された土器は、形や模様の特徴から堀之内式・加曾利B式と名付けられており、今から約3,500年前の縄文時代後期に作られた土器と考えられています。

縄文時代は、容量の大きい深鉢形土器が盛んに作られますが、後期に入ると現代の急須にもよく似た注ぎ口を持つ注口土器が現れます。また、やや小ぶりの鉢形土器には、内側まで文様がつけられるなど、形や文様の付け方が変化します。これらの土器は、器壁が分厚いこれまでの縄文土器の特徴とは異なり、器壁は薄く、表面を光沢が出るほど磨き上げます。

一方で、鍋の様に煮沸具として使われる深鉢形土器は、容積が大きく、器壁は分厚く、文様や表面の仕上げは簡素なものとなります。

このように後期の土器は、用途によって作り分けていたと考えられています。前者の「注ぐ」、「盛る」といった器種は、粘土の準備から成形まで徹底して丁寧に作られており、「精製土器」と呼ばれています。後者の日常的に火を受け、消耗品ともいえる煮沸用の深鉢は、作りが粗い事から「粗製土器」と呼ばれています。

曾我谷津岩本遺跡でも両者が出土しており、縄文時代後期の生活を支えていたものと考えられます。



写真5 天神山遺跡第Ⅲ地点の「精製土器」(左)と「粗製土器」(右)



写真6 曾我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点の柄鏡形敷石住居から出土した縄文土器

## 2 土器づくりのムラの発見?! (曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点の調査)

城前寺の北東約160mの地点で、平成24年(2012)に行われた曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点の発掘調査では、約90㎡の調査区から縄文時代中期(勝坂式期)の<sup>かつさか</sup>竪穴住居跡3、集石4、配石1、焼土2、土坑23、ピット21などが検出されました。そのうち、2号竪穴住居跡の中から、小田原市を含む足柄平野周辺地域で初めて「<sup>だいがたどき</sup>台形土器」と呼ばれる土器が見つかりました。

台形土器は、ものを載せるための円形の受け面とこれを支える脚部を持つ土製品で、縄文土器を製作する台としての機能が有力視されています。縄文時代には土器づくりは女性の役割で、ムラの広場で女性たちが集まって土器づくりを行い、母親から娘へと技術が継承されていたというイメージが漠然と持たれてきました。そうしたなか、

表3 縄文時代の年代と年代測定値

		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期
		約14,000年前	約9,500年前	約5,000年前	約3,500年前	約2,400年前	約1,300年前
<sup>14</sup> C年代測定法による年代測定値	佐藤宏之(2013)	16,000-11,500calBP	11,500-7,000calBP	7,000-5,500calBP	5,500-4,400calBP	4,400-3,200calBP	3,200-2,300calBP
	辻誠一郎(2013)			7,000-5,470calBP	5,470-4,400calBP	4,400-3,400calBP	3,400-3,000calBP

※「calBP」は、<sup>14</sup>C年代測定法による値を校正した年代で、1950年より何年前かを表したものの。

近年、発掘調査により竪穴住居の中から土器を製作するために貯蔵した粘土や台形土器などが見つかることから、土器づくりには、屋根があって異物が混入しにくい場所の確保が重要であり、各住居内などイエ単位で行われていた可能性が考えられるようになってきました。

曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点で出土した縄文時代中期の勝坂式土器は、口唇部（土器の縁の周囲）に縦の線を充填する文様をもつものが多くあります。この文様は勝坂式の中心地である武蔵野・多摩地方にはなく、この地域に特徴的なローカルな土器だといえるでしょう。東海地方の土器（北裏C1式）が共伴していることなどから、静岡や山梨の縄文文化の影響を受けてつくられた可能性があります。

曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点2号竪穴住居跡では、焼成粘土塊やミニチュア土器が複数点みついています。焼成粘土塊は粘土の質を確かめるテスト・ピースの可能性が指摘されています。出土した土器の中には、文様の付け方が雑で規範を逸脱したようなものが含まれている可能性があります。また、地山が一部被熱して赤色化した範囲があり、土器焼成遺構の可能性が指摘されています。このように、土器づくりのムラとしての特徴をいくつか備えていることが発掘調査で明らかになってきました。



写真7 焼成粘土塊



写真8 出土した台形土器



写真9 脚部に穴のある台形土器



写真10 台形土器と共伴するミニチュア土器



写真11 台形土器 (No.1)



写真12 台形土器 (No.2)



写真13 台形土器 (No.4)



写真14 台形土器 (No.7)



写真15 台形土器 (No.7)(上から)



写真16 台形土器 (No.5)



写真17 焼成粘土塊

表4 曾我谷津岩本遺跡第Ⅱ地点で出土した台形土器

No.	出土位置	分類	受け面径 (cm) 推定値	高さ (cm)	備考
1	2住_39号	円卓形 (鐙付形)	21.3	—	円盤状に残存。白色・黒色付着物。
2	2住_49号	円卓形 (鐙付形)	18.9	—	黒色付着物。受け面鉱物粒子の浮き出し。
3	2住No.73	円卓形 (鐙付形)	(15.6)	5.1	
4	2住No.82	—	—	—	受け面のみ。淡灰色粘土状付着物。
5	2住A1N	—	—	—	脚のみ。接地面の荒れ。
6	2住A1N	—	—	—	脚のみ。
7	1溝A2・A3	円卓形 (鐙付形)	17.7	6.4	透かし孔あり。受け面鉱物粒子の浮き出し。黒色付着物。
8	1溝A2	円卓形 (鐙付形)	(18.5)	—	
9	1溝A1	円筒形 (鐙無形)	—	4.4	受け面平滑。
10	1溝A1	円卓形 (鐙付形)	—	—	
11	1溝A1	円卓形 (鐙付形)	—	—	
12	1溝A3	円卓形 (鐙付形)	—	—	
13	1溝A3	—	—	—	脚端部のみ。透かし孔あり。
14	1溝A1	—	—	—	脚端部のみ。
15	1溝北壁	円卓形 (鐙付形)	—	—	受け面平滑。
16	Ⅱ層A1	円筒形 (鐙無形)	—	4.2	接地面荒れ。

### III <sup>もの み づか</sup>物見塚古墳の発掘調査 (古墳時代)

#### 1 曾我地区ではじめての学術調査

物見塚の調査は、平成元年8月24日から9月13日の期間で実施された学術調査です。上曾我・曾我岸・曾我谷津・曾我原・曾我別所の一帯に所在する中世曾我氏ゆかりの土地に対して、地元から発掘調査の必要性について要望があったことを受けて、地域の方々の協力のもと小田原市教育委員会が調査を行いました。発掘調査の作業には、多くの地元の方々が参加しました。

発掘調査を実施した地点は、2地点あります。1箇所は、『新編相模国風土記稿』に「物見塚」として記載され、当時すでに平坦地となっていたものの、地元で物見塚と伝承されていた場所です。もう1箇所は、曾我丘陵の中腹の中で足柄平野が一望できる場所が選ばれました。いずれの調査地点も、地権者と地元の方々の熱意



写真18 物見塚古墳の調査風景

# 曾我遺跡群お散歩マップ

—楽しく歩いて、地域の歴史に触れてみよう!—

※まち歩きをする際は、車に注意してください。



天津神社



宗我神社

物見塚古墳  
第2調査地点

縄文時代後期の  
石棒などが祀ら  
れた祠があります



物見塚古墳  
第1調査地点

説明板①：曾我岸本岸遺跡第I地点の調査  
説明板②：縄文時代の土器づくりのムラ  
説明板③：縄文時代の敷石住居の発見

道祖神などの  
石造物がたくさん

説明板①

尾崎一雄の  
文学碑

説明板③

太宰治ゆかりの  
●雄山荘

城前寺には曾我  
兄弟の墓やゆか  
りの碑があります

下曾我駅



縄文時代の敷石住居

国府津→

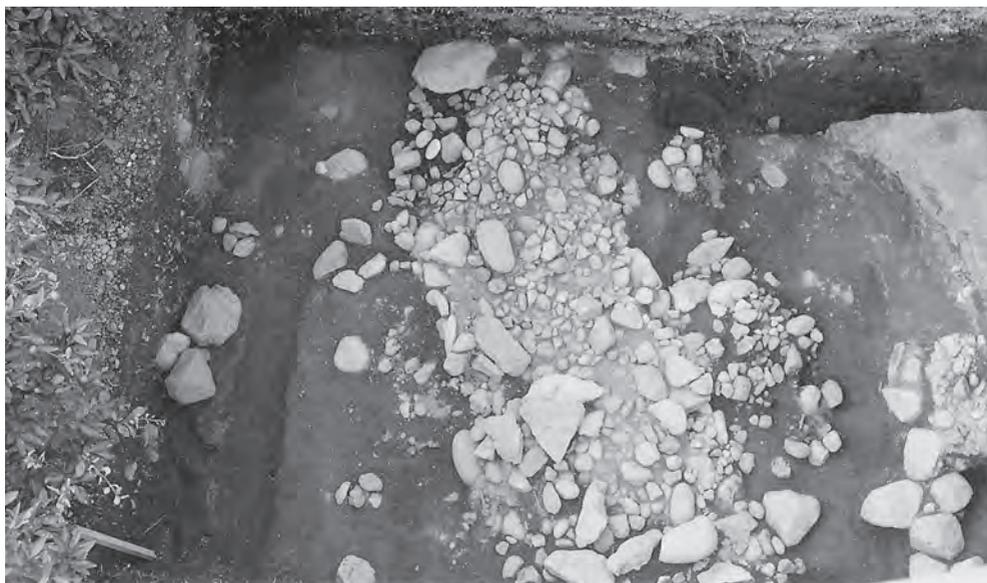


写真19 古墳の石室露出状況

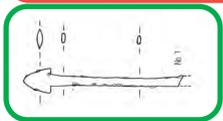
と厚意により実施することができたものです。そして、調査終了後には発見された遺構の保護のために川砂で埋め戻された後、修景整備事業が実施され、見学できる場所として活用されています。

## 2 物見塚古墳の調査

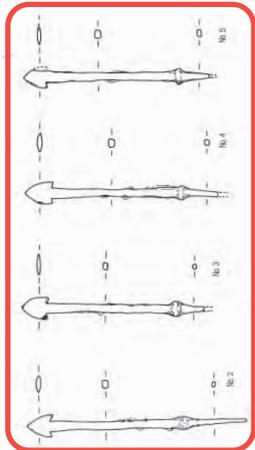
当時、分布調査や文献等によって遺跡の存在が知られていた曾我氏ゆかりの土地として発掘調査がはじまったことから、中世関連遺跡、特に中世居館跡などが発見されると想定されていました。しかし、実際に調査がはじまると縄文時代中期や古墳時代後期の土器などが採取され、原始・古代の人々の痕跡も残る土地であることがわかりました。

特に、第1調査地点で古墳の石室が発見されたことは注目されます。北南3m×東西6mに設定した調査区の西側を約1m掘り進めたところ、河原石群が出土し、鉄鍬てつくわや金環等の遺物が出土しました。これらの河原石群は、古墳の石室の床面の河原石敷きであることがわかりました。北側部分でこぶし大の河原石が途切れる箇所があり、その部分は奥壁のあった部分であると推測されます。羨門・羨道・前庭部等の施設については、調査範囲の南側に存在すると想定されます。

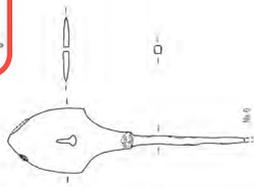
三角形狭鋒筥被式鉄鏃



三角形狭鋒脇持筥被式鉄鏃

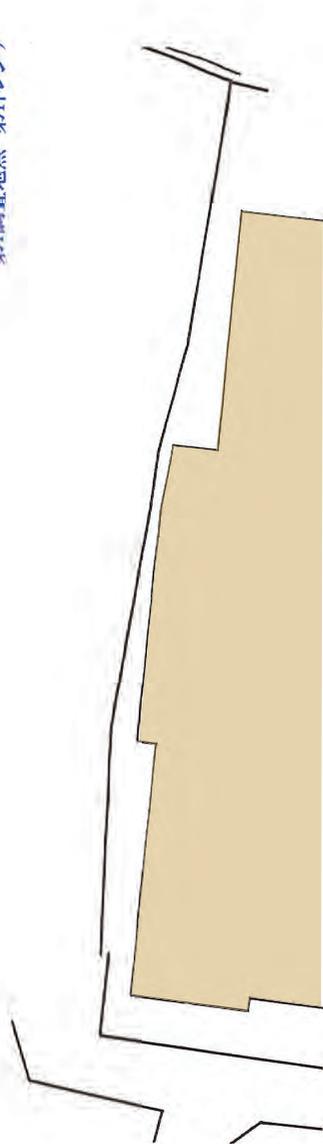


第1調査地点 第2トレンチ



大型の広根式鉄鏃

第1調査地点 第1トレンチ



第3図 物見塚古墳第1調査地点 調査区と出土遺物



写真20 遺物出土状況

古墳の石室からは、鉄鍬<sup>てつぞく</sup>、刀子<sup>とうす</sup>、金環<sup>きんかん</sup>、石突<sup>いしづき</sup>などが出土しました。鉄鍬は、三角形<sup>さんかくけい</sup>狭鋒篋被式<sup>さみねのかぎしき</sup>と呼ばれる、先端が三角形で矢柄に茎を入れる型式の鉄製の鍬が見つっています。また、金環は銅の地金に鍍金が施されたものでした。

出土した遺物の数は多くはないものの、6世紀後半に築造された群集墳の一つであると推測されます。古墳時代後期の古墳は、市内の久野古墳群のように狭い地域にまとまって分布していることが多いですが、曾我地区では古墳の存在についてはあまり知られておらず、曾我丘陵南斜面に群在する横穴墓とともに、古墳の分布について検討していく必要があります。

第1調査地点の第2トレンチでは、岩盤層を掘り込むピット群が見つかりました。南北3m×東西2mの調査区と、限定された調査面積であったため、ピット間の関連等についての明確な把握はできませんでしたが、遺構の展開は注目されます。

曾我丘陵の中腹で行われた第2調査地点の調査は、曾我氏居館の想定地とされた場所の背後にあたる見晴らしの良い場所であったことから調査地点に選ばれました。標高は第1地点より40m高い地点に位置しており、当時、休耕地であったことから地権者の協力を得ることができました。耕作土の直下で立川ローム層や武蔵野ローム層が確認され、考古学的な所見を得ることはできませんでした。

# IV 土器製作の場の発見?! (古代)

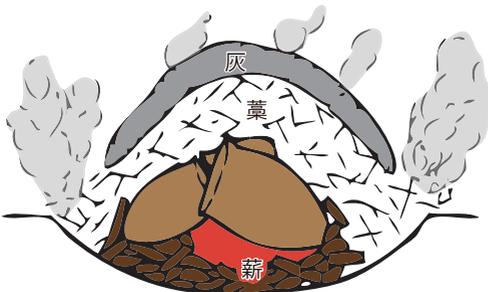
## 1 古代の土師器づくり

土師器と呼ばれる素焼きの土器は、日本列島全域で古墳時代以降、人々の暮らしに欠かせない器となります。土師器は、弥生土器の流れを引く焼き物で、焼成時に酸素が多く供給されることから、肌色から橙色の色調をしています。

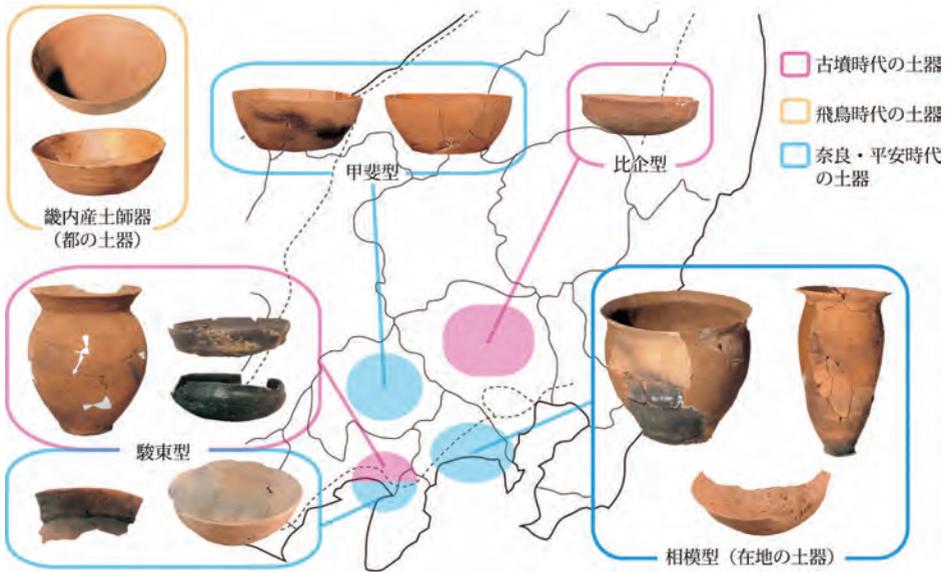
土器は縄文時代には、野焼きで焼き上げられていましたが、土師器は「覆い焼き」と呼ばれる方法で焼成されます。「覆い焼き」は、掘り窪められた穴の底に燃料である薪を並べ、その上に土師器を置き、外側を藁や灰、土などで覆って焼き上げる方法です。外側を覆うことで温度を一定に保つことができるので、燃料を追加することなく、効率良く焼くことができます。また、焼成温度が500～900℃と野焼きよりも高温になるため、より硬い土器が焼き上がります。

小田原市内で出土する土師器には、在地で作られたもののほかに、他地域からの搬入品が含まれています。この関係は古墳時代から続いていて、都で流行した畿内産土師器と呼ばれる上質な坏をはじめ、駿河東部、武蔵国、甲斐国の土器が見つかっています。現在までの多くの調査成果や研究の積み重ねにより、小田原と他地域の交流については少しずつその実態が解明されてきました。しかし、在地でどのような生産体制で土師器が生産されていたのかについては、まだまだ不明な点が多くあります。

近年発掘調査が行われた曾我岸本岸遺跡では、土師器の焼成遺構と考えられる遺構が見つかり、小田原市域における丘陵部での土器等の生産活動の様子が注目されています。今後の詳細な検討で、小田原市域における古代の土器生産がどのようなものであったのか明らかにすることができるでしょう。



第4図 覆い焼きのイメージ



第5図 小田原市で出土する土師器とその産地

## 2 土師器を焼いた施設と焼かれた土師器

土師器を焼いた施設は、「土師器焼成遺構」、「土師器焼成窯」などによばれています。この遺構は、平坦な地表面を広く円形、楕円形、不整形などの形に掘り込み、その底を平坦にいたします。そして、底に土器と燃料を並べ、その上からも燃料を積み上げて焼いていたとされています。大規模な土師器焼成遺構が存在していた遺跡では、焼土や被熱した痕が確認できる焼成遺構の他に、土器を成形する際に使用する回転台（ロクロ）の軸を刺した跡であるロクロピットや、材料となる粘土を得るための採掘坑、失敗した土器を捨てる廃棄土坑、粘土が詰められた土坑、さらに工人の作業場や生活の場である住居跡や掘立柱建物跡が見つかっています。このような大規模な土師器焼成遺構の発見例は全国的に多くはありませんが、遺跡からは膨大な量の土師器が出土しています。そのため、各地で大量の土師器生産と消費が想定されます。先述のような大規模な施設で焼かれていたのは、当時の役所や寺院などに供給される特別な土師器ではないかと考えられています。一方、集落での日常生活で使用された土師器は、大規模な焼成施設は使用せず、各集落で小規模な土坑などを利用して焼かれていたと考えられています。

### 3 曾我岸本岸遺跡第 I 地点の調査

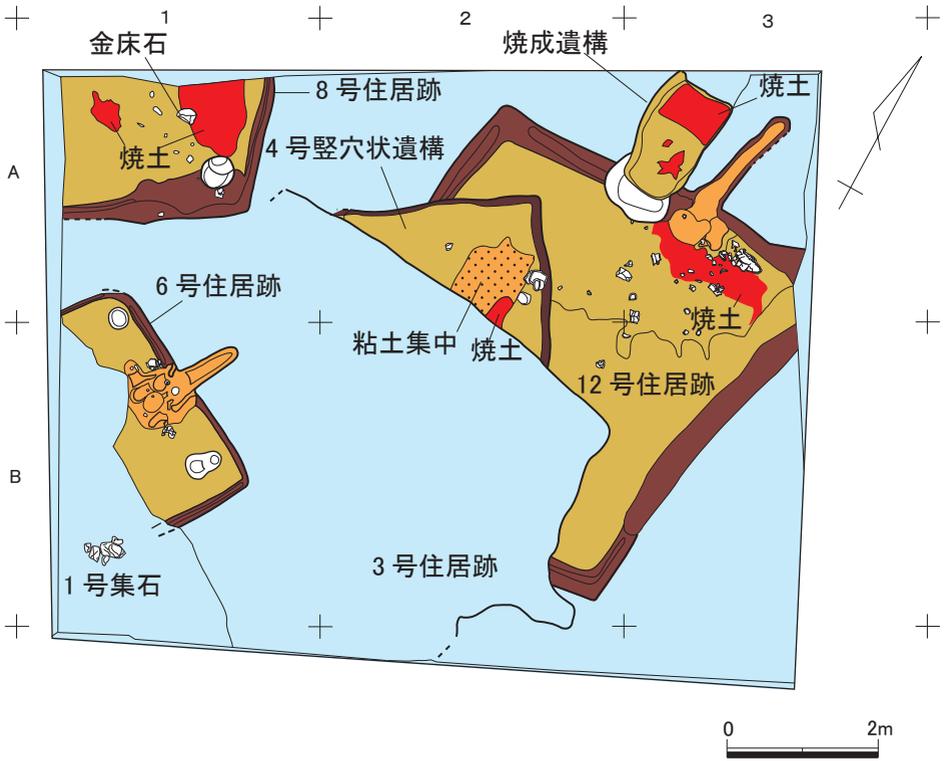
平成23年（2011）2月～5月に実施した曾我岸本岸遺跡第 I 地点の調査では、縄文時代の集石や、古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡、土坑、ピット、溝状遺構、焼成遺構、近世の土坑やピット、溝状遺構などが検出されました。

特に、古代の土器焼成遺構とみられる遺構が検出されたことが注目されます。この焼成遺構からは、焼成不良な生焼けの土器片が出土しています。また、焼成遺構の周辺からは焼成粘土塊しょうせいねん どかいが見つかっています。この焼成粘土塊には葉スサの痕がありました。このため、覆いなどの破片と考えられます。焼成粘土塊は、焼成の作業中にできるものであることから、曾我岸本岸遺跡第 I 地点で見つかった焼成遺構で土器を焼いていた可能性が指摘されています。

焼成遺構より下層では、相模型甕かめが出土した12号住居跡が検出されており、この焼成遺構の時期は8世紀後葉より遡ることはないと考えられています。また、古墳時代後期の住居跡からは、金床石かなどこいしとみられる石製品が出土しており、鉄器製作が行われていたと指摘されています。



写真21 曾我岸本岸遺跡第 I 地点の全景写真



第6図 曾我岸本岸遺跡第I地点の調査区実測図



写真22 4号縦穴状遺構粘土集中（東から）



写真23 焼成遺構（西から）

## V 中世以降の曾我

### 1 曾我氏の居館跡の痕跡

縄文時代から奈良・平安時代まで、在地の土器生産に関わる考古学的な発見があった曾我地区ですが、その後の時代においても人間活動の痕跡が色濃く残されています。『新編相模国風土記稿』には、曾我谷津地区にある城前寺の東側一帯が曾我氏の居館跡であると記され、二重の土塁を巡らせた一町四方の館であったと推察されています。

曾我谷津岩本遺跡第I地点の調査では、14世紀後半～15世紀前半に位置づけられる溝状遺構が見つかりました。深さは122cm、主軸方向はN-13°-Eで、断面の形は逆台形でした。この溝状遺構は、形状・規模から中世期に構築される溝状遺構のうち、防御目的の大規模な「堀」ではなく、居館内の区画目的の「堀」として機能していたと推定されます。このことから、溝状遺構の北側部分は居館空間に入る土橋部分である可能性があり、この溝状遺構の東側が居館内として利用されていたと推測されます。



写真24 曾我谷津岩本遺跡第I地点の中世区画溝（南から）(写真提供：株式会社盤古堂)



写真25 中世区画溝と集石（西から）  
(写真提供：株式会社盤古堂)



写真26 中世区画溝の土層（東から）  
(写真提供：株式会社盤古堂)



六本松峠は、江戸時代には大山詣の信仰の道、大山街道が重複していた拠点となっており、曾我の大山道は、千代～曾我原～殿沢川～曾我別所～六本松峠～田中を経由するルートでした。道の遺構などは、これまでの発掘調査では見つかっていませんが、歴史史料や伝承などを複合的に検討していくことで、地域の歴史をより詳細に描いていくことができるでしょう。

### 3 江戸時代の曾我

江戸時代の発掘調査事例はわずかですが、曾我谷津岩本遺跡第I地点では、17世紀後半から18世紀初頭の近世の遺構が見つかりました。近世の遺構としては井戸やごみ穴が見つかり、近世期の城前寺の土地利用がわかってきました。特に、肥前系ひぜん染付磁器や南川原窯産の最上手輪花皿なんがわらや白泥象嵌陶器鉢さいじょうてりんかざらはくでいぞうがんは江戸府内の武家地から出土する陶磁器と同等の製品で、近世期における隆盛を伺わせる資料がみついています。

### 4 近代以降の曾我

曾我別所・曾我原・中河原の梅林を総称して曾我の梅林と呼ばれ、現代においても富士山を背景に一斉に梅の花が咲き誇る名所となっていますが、近代に入り、曾我の地は蜜柑と梅の名産地として発展していきました。梅の植栽が急激に増加したのは明治40年（1907）以降で、日露戦争に際して梅干しの需要が増加したことに起因します。

曾我地区には尾崎一雄や太宰治などゆかりの文人がいます。宗我神社参道の大鳥居付近には、尾崎一雄の文学碑があります。尾崎一雄（1899-1983）は、宗我神社の神主の家に生まれ、昭和12年（1937）には第5回芥川賞を受賞しました。作品の舞台は、

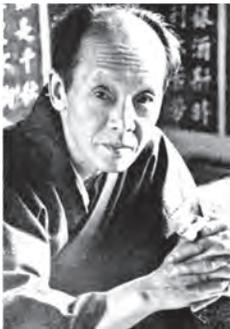


写真27 曾我ゆかりの文人・尾崎一雄（市立図書館所蔵）

生まれ育った下曾我を中心とするものが多く、昭和の代表的私小説作家として独自の境地を開いたほか、地元小田原のために貢献しました。

また、現在は焼失してしまいましたが、太宰治の小説『斜陽』の舞台となった雄山荘という建造物があり、小説には建物の内部や周辺環境が詳しく描写されています。高浜虚子（1874-1959）はこの雄山荘で昭和12年（1937）に句会を主催し、曾我の光景を詠みました。

時代区分		主 な で き ご と	本書に登場する事柄	
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65000 年前
	後期 草創期	細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石鏃の使用が始まる		16000 年前
縄文時代	早期	定住化の進行 気候温暖化による海水面上昇（縄文海進）		15000 年前
	前期	羽根尾貝塚がつくられる		
	中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落	台形土器 曾我谷津岩本遺跡第 I 地点 の敷石住居跡	5500 年前
	後期	祭祀具の発達		4500 年前
	晩期 前期	水稻耕作の本格的な開始		
弥生時代	中期	中里遺跡の出現 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける		57
	後期			
	前期	前方後円墳の築造開始		
古墳時代	中期			
	後期	仏教伝来 久野古墳群	物見塚古墳	538
古代	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡の造営		645
	奈良時代	平城京へ遷都		710
	平安時代	平安京へ遷都	曾我岸本岸遺跡第 I 地点の 土師器焼成遺構 伝曾我氏居館跡	794
	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる	『曾我物語』	1192
中世	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の完成 豊臣秀吉の小田原攻め		1590
	江戸時代	江戸幕府が開かれる 富士山宝永の大噴火 ペリー来航	曾我谷津岩本遺跡第 I 地点 の区画溝	1707 1853
近世 近・現代	明治	明治改元、五箇条の誓文の公布		1868
	大正			
	昭和 平成	太平洋戦争終結	蜜柑・梅の産地として発展 太宰治『斜陽』ゆかりの家	1945

## 文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。曾我遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 小田原市教育委員会 1997『物見塚古墳発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第63集  
窯跡研究会 1997『古代の土師器生産と焼成遺構』  
小池 聡ほか 2010『曾我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点』株式会社盤古堂  
佐藤宏之 2013「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『岩波講座 日本歴史1 原始・古代  
1』岩波書店  
辻誠一郎 2013「縄文時代の年代と陸域の生態系史」『講座日本の考古学3 縄文時代  
(上)』青木書店  
諏訪間順ほか 2014『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流』平成26年度小田原城  
天守閣特別展、小田原城天守閣  
小田原市教育委員会 2015『縄文土器を作る～縄文人の造作を支えた台形土器～』平成26年度遺跡  
講演会資料集

小田原の遺跡探訪シリーズ13

### 曾我遺跡群

—大磯丘陵に営まれた縄文集落と曾我氏の遺跡—

平成30年3月19日 印刷

平成30年3月23日 発行

編 集 小田原市教育委員会

発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電 話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: [bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp](mailto:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp)

印 刷 有限会社 石橋印刷

